藍住町の社寺建築

――――――――――――――――――― 社寺建築班（郷土建築研究会）―――――――――――――――――――

坂口　敏司[*1]　大坂　公吉[*2]　黒崎　仁資[*3]　中野　真弘[*4]　広塚　荘子[*5]　宮田　千鶴[*6]
宮田　育典[*7]　村上　香奈[*8]　森兼　三郎[*9]

1．はじめに

藍住町は徳島県の東部に位置し、吉野川と旧吉野川に挟まれた徳島平野にある。西は板野町、北は鳴門市、東と南は徳島市に隣接する。

私たち社寺建築班は、７月28日から町内に入り、社寺建築を建築学的見地から調査した。神社は38社、寺院、お堂は22カ寺を調査し、案内図（**図１、後掲**）を作成し、それぞれの建立年代や構造、建築様式などを一覧表（**表１・２**）にまとめた。そのうち神社４カ所、寺院２カ所については詳細調査を行い、実測図を作成した。建築年代については、書籍や棟札から確認できるもの以外は、建築様式から推測することとする。

また、神社３社、計24枚の棟札を調査し、その寸法、年代、大工名等の内容を記録し、一覧表（**表３**）にまとめた。また、建立年代等の確定に大きな成果を得た。

2．藍住町の社寺建築概要

1）神社建築の概要

町内で建立年代が最も古いものは、伊比良咩神社本殿で、棟札より江戸後期の文化９年（1812）の再建であることが確認できた。また、拝殿はさらに古く寛政２年（1790）の再建であるが、その後、大規模に修繕が行われている。次に諏訪神社本殿が文化13年（1816）、江戸後期のものとしては、住吉神社拝殿、藤部八幡神社本殿が文政５年（1822）、元村の八幡神社拝殿が文政11年（1828）であった。元村の八幡神社本殿と幣殿は、江戸末期の安政６年（1859）、他には藤部八幡神社拝殿が文久元年（1861）に再建されている。これら以外で判明したものは明治以後に再建されたものであった。

様式では、徳島県下において最も多く見られる「流造」がほとんどで、「春日造」が３社、春日造を変形させた「王子造」、「神明造」がそれぞれ１社あった。また、覆屋や集会所などに収められたものが多くあった。規模は柱間の数で表し、最大のものは、三間社で、元村の八幡神社本殿と若一王子神社本殿の２社で見られた。また、二間社以上のものは奥行きが２間となるのが通常であるが元村の八幡神社本殿は奥行が１間となった特徴的な建物である。敷地傍示の八坂神社本殿が二間社、その他はすべて一間社であった。また、覆屋に入った小規模なものには、簡素な宮殿のみのものもあった。

2）寺院建築の概要

町内で建立年代が最も古いものは、法音寺本堂で、外観はサッシを入れるなど大規模に修繕が行われ新しく見えるが、明和２年（1765）に火災により消失し再建と町誌に記載されている。観音院観音堂は18C後期、東光寺本堂と正法寺本堂が19C中期、他には千光寺の伽藍を形成する観音堂や鐘楼門などが19C中期のものと様式から考えられる。他の寺院は明治以後に再建されたものであった。この中でも、正法寺本堂は町指定の有形文化財で、内陣は彩色が施された質の高い建物である。鐘楼門を持った寺院が２カ寺あり、両方とも三間一戸で、上の重の縁

＊1　坂口建築設計室　＊2　大坂工務店　＊3　黒崎建設　＊4　真建築都市研究室　＊5　西田設計　＊6　徳島大学工学部
＊7　宮田建築設計工房　＊8　徳島大学大学院　＊9　Ａ＋Ｕ森兼設計室

表１　神社建築調査一覧表

No.	神　社　名	鎮　座　地	創　　建	祭　神	旧社格
1	杉尾神社 すぎお	笠木字中野147	不詳 阿波誌、寛保帳に記述あり	天石門別八倉比売命	旧村社
2	神明神社 しんめい	住吉字江端49	不詳 弘治元年（1555）勧請と伝わる	天照大神	旧無格社
3	八坂神社 やさか	矢上字原40	不詳	素戔嗚命	旧無格社
4	神明神社 しんめい	住吉字乾90 珍成集会所内	不詳	天照大神	旧無格社
5	住吉神社 すみよし	住吉字神蔵59	承安２年（1172）津守国房の勧請 創祀と伝わる	表筒男命　中筒男命　底筒男命 神功皇后　天穂日命以下五柱合祀	旧郷社
6	南陽神社 なんよう	勝瑞字西勝地319－１	永正５年（1508）細川弥九郎澄賢が祀る。 昭和33年合祀し、昭和37年現名に改称	大山咋命　天照大神　素戔嗚命	旧村社
7	春日神社 かすが	矢上字春日68	不詳 阿波誌、寛保帳に記述あり	武甕槌命	旧村社
8	八坂神社 やさか	乙瀬字青木	不詳 阿波誌、に記述あり	須佐之男命　稲田姫命 八島士努美命	旧無格社
9	荒神社 こう	東中富字東安永85	元禄６年（1693）建立と伝える	須佐之男命	旧村社
10	諏訪神社 すわ	奥野字山畑148	不詳。三好氏が細川氏に替わり勝瑞の館に居を構えるに当たり勧請創建と伝わる	建御名方命	旧村社
11	八坂神社 やさか	徳命字新居須82	不詳 貞享２年（1685）建立の棟札あり	武速須佐之男命	旧村社
12	八幡神社 はちまん	徳命字小塚東１	不詳 寛永12年（1635）建立の棟札あり	応神天皇	旧村社
13	藤部八幡神社 ふじべはちまん	徳命字西ノ丁268	元禄年間に唐便八幡神社に流八幡神社を合祀 宝暦元年（1715）遷座、文化11年八坂神社を合祀	応神天皇　神功皇后　仁徳天皇 素戔嗚命　稲田媛命　八柱命	旧村社
14	八幡神社 はちまん	徳命字元村108	不詳 元和６年（1620）の棟札あり	誉田別命　天穂日命 武速須佐之男命	旧村社
15	伊比良咩神社 いびらめ	徳命字前須西65	式外の古社 貞観14年（872）従五位下を授かる	阿比良比咩命　大己貴命 素戔嗚命	旧村社
16	若一王子神社 にゃくいちおうじ	東中富字大塚傍示17－１	不詳 明治３年（1870）現社名に改称	国常立尊　伊弉諾尊　伊弉冉尊	旧村社
17	八坂神社 やさか	東中富字敷地傍示41－１	天正３年（1575）三木播磨守により創建される	素戔嗚命	旧村社
18	富吉神社 とみよし	富吉字富吉163	不詳 阿波誌、寛保帳に記述あり	応神天皇　仲哀天皇他八柱合祀	旧村社
19	北野神社	東中富字権現傍示46	不詳 若一王子神社（16）　摂社	天穂日命	旧村社
20	八坂神社	住吉幸島中村	不詳	不明	
21	八幡神社	住吉矢上江ノ口	春日神社（７）　末社	須佐之男命、稲田姫命 八島士努美命	
22	高橋神社	東中富竜池	不詳	不明	
23	八坂神社	奥野字原163	諏訪神社（10）　飛地境内社	武速須佐之男命	
24	船戸神社	奥野字乾66	諏訪神社（10）　飛地境内社	船戸命	
25	八坂神社	奥野字猪熊61	諏訪神社（10）　飛地境内社	武速須佐之男命	
26	船戸神社	奥野字前川66	諏訪神社（10）　飛地境内社	末那斗命	
27	若宮神社	東中富字鑓場傍示110	若一王子神社（16）　末社	此花佐久夜姫命	
28	大富彦神社	東中富字西傍示33－２	若一王子神社（16）　末社	犬伏左近霊	
29	神明神社	東中富字敷地傍示62	八坂神社（17）　末社	大日霊命	
30	蛭子神社	住吉字神蔵57	住吉神社（５）　飛地境内社	大国主命、事代主命	
31	日枝神社	矢上字安任100	春日神社（７）　末社	大山咋命	
32	三宝荒神社	奥野字猪熊	観音院隣		
33	親神神社	勝瑞字成長	不詳	不明	
34	松藤神社	富吉字豊吉88	不詳		
35	陣蛇明神	奥野字乾（船戸神社南）	不詳	不明	
36	八坂神社	住吉字神蔵82	不詳		
37	杉野尾神社	住吉字若宮145	不詳		
38	王子神社	徳命字小塚北	大正９年に祠を建てる	天正10年の中富川の合戦で戦士した兵士	

平成17年７月末日現在

鳥居様式（材料）	本殿　建築様式	拝殿　建築様式　向拝	特　記　事　項	A
明神（御影） 昭和59年	不明 木造　覆屋	木造　切妻造　桟瓦葺 向拝：縋破風　桟瓦葺	拝殿：昭和59年	○
神明（檜）	不明 木造　覆屋	木造　切妻造　銅板葺 向拝：縋破風　銅板葺	拝殿：昭和57年	○
明神（御影） 昭和10年４月	木造　小社殿 木造　覆屋	木造　切妻造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺		○
神明（銅板巻き）	不明 RC造　覆屋	RC造　陸屋根 珍成集会所として利用		○
明神（御影） 享保18年	木造　四棟並列　一間社春日造 柿葺き	木造　入母屋造　銅板葺 向拝：大唐破風　銅板葺	本殿：明治16年（1883）　町指定文化財 拝殿：文政５年（1822）＊1	○
明神（御影） 明治28年	不明 木造　覆屋	木造　入母屋造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺		○
両部（木造　朱塗り）	木造　一間社春日造　銅板葺	木造　入母屋造　銅板葺	本殿、拝殿：平成３年 随身門：平成３年	
明神（御影） 文政６年	木造　一間社流造　柿板葺 木造　覆屋	RC造　陸屋根	本殿は明治初期頃のものと考えられる	○
明神（御影） 平成９年	木造　一間社流造　銅板葺	木造　入母屋造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺		
明神（御影） 昭和37年	木造　一間社春日造　銅板葺 一部柿板葺	木造　入母屋造　銅板葺 向拝：大唐破風　銅板葺	本殿：文化13年（1816）町指定文化財 拝殿：平成16年	○
明神（御影） 明治22年	木造　一間社流造　柿板葺	木造　切妻造　銅板葺 向拝：大唐破風　銅板葺	本殿：明治4年　拝殿：昭和24年　幣殿：昭和63年 本殿鞘殿：明治31年　平成15年大修繕	○
台輪（御影）	木造　一間社流造　銅板葺	木造　入母屋造　本瓦葺 向拝：大唐破風　本瓦葺	昭和53年修繕	
明神（御影） 文化７年	木造　一間社流造　銅板葺	木造　入母屋造　本瓦葺 向拝：大唐破風　本瓦葺	本殿：文政５年（1822）　幣殿：明治12年（1879） 拝殿：文久元年（1861）	
明神（御影） 大正８年	木造　三間社流造　銅板葺	木造　切妻造　本瓦葺 千鳥破風付き	本殿：安政６年（1859）　幣殿：安政６年（1859） 拝殿：文政11年（1828）	
明神（御影）大正15年 台輪（青石）文化２年	木造　一間社流造　桧皮葺	木造　入母屋造　銅板葺 向拝：入母屋造軒破風　銅板葺	本殿：文化９年（1812）町指定文化財　拝殿：寛政２年（1790） 青石の一の鳥居：町指定文化財	○
明神（御影） 大正10年	木造　三間社流造　銅板葺	木造　片入母屋造（妻入）銅板葺 向拝：縋破風　銅板葺		
明神（御影） 明治９年	木造　二間社流造　銅板葺	木造　入母屋造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺		
明神（御影） 慶応元年、天保６年	木造　一間社流造　銅板葺	木造　入母屋造　銅板葺	平成８年　屋根葺替	
明神（御影） 大正14年	RC造　小社殿　神明造	礎石のみ	太鼓橋：明和２年（1765）　町指定文化財	
明神（RC） 昭和２年	不明 RC造　覆屋	RC造　陸屋根 集会所として利用		○
明神（御影） 明治22年	不明 RC造　覆屋	RC造　切妻造　鉄板葺 向拝：軒唐破風　鉄板葺		○
	木造　小社殿 一間社流造　柿板葺	木造　切妻造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺	拝殿（鞘殿兼用）：明治21年	○
	RC造　一間社流造　モルタル仕上		平成13年塗装修繕	
明神（御影） 昭和４年	木造　小社殿	木造　片入母屋造（妻入）銅板葺 向拝：縋破風　銅板葺		○
明神（御影）明治13年	木造　一間社王子造　柿葺	木造　寄棟造　桟瓦葺	本殿：明治５年　拝殿：平成６年	○
	不明	木造　切妻造　スレート瓦葺		○
	石造　小社殿			
明神（御影）平成13年	木造　小社殿　一間社流造	木造　切妻　瓦棒葺		○
明神（御影） 明治９年	木造　小社殿　片入母屋 柿葺	木造　切妻造　本瓦葺 向拝：縋破風　本瓦葺		○
	木製　宮殿	木造　切妻造　トタン葺		○
平成10年	木造　小社殿	木造　切妻造　桟瓦葺 向拝：縋破風　桟瓦葺		○
（御影）	木造小社殿　一間社流造銅板葺			
	木造　小社殿	RC造　切妻造　本瓦葺		○
	木造　切妻造　桟瓦葺	向拝：切妻（妻入り）桟瓦葺	平成	○
木造　平成６年	RC造　小社殿		昭和42年再建	
明神（御影）慶応元年	不明（集会所内に鎮座）	鉄筋コンクリート造　陸屋根		○
	不明（集会所内に鎮座）	木造　切妻造桟瓦葺　集会所	集会所：平成７年	○
様式なし	石造　小社殿			

＊１：阿波の寺社建築　　A.　本殿が覆屋などで覆われる

表 2　寺院建築・御堂建築　調査一覧表

	寺　院　名	所　在　地	開　基	宗　派	山　号
A	福成寺	住吉字逆藤60	中興開基　権僧正寮祐上人 （文亀元年（1501）遷化）	真言宗 高野山	唯称山寿楽院
B	観音寺	勝瑞字東勝地204	正保二年（1645）3月21日 慶長年間の開基の記述も	真言宗 西南院	阿関山（法輪山） 延寿院
C	地福寺	勝瑞字西勝地227	文治年間（1185～90）	真言宗 高野山	景徳山
D	法音寺	乙瀬字乾21	明和二年（1765）の火災で現在地に移る	真言宗 荘厳院	恵日山普門院
E	見性寺	勝瑞字東勝地179	宝治三年（1249）岩倉に開山 永正年間（1504～21）勝瑞に移る	禅宗臨済宗 妙心寺派	竜音山
F	正法寺	矢上字西18－1	寛文九年（1669）開山、改称 元は、正岡寺と称し禅宗	法華宗本門流	青竜山五音院
G	観音院	奥野字猪熊96	神亀三年（726）	真言宗 高野山	雲竜山法隆寺
H	千光寺	徳命字元村86	白鳳年間（７C後半）、行基菩薩開創	真言宗 大覚寺末寺	宝珠山愛染院
I	東光寺	東中富字東傍示39	天和年間（1681～84）	真言宗中本寺 高木・宝厳寺末	命壺山薬師院
J	徳善寺	奥野字猪熊73	寛永十九年（1642）３月25日、円誓	真宗 本派本願寺	一乗山円満院
K	光善寺	東中富字東郷	明応三年（1494）３月、正珍律師	真宗 本願寺の直末	大雲山慈心院
L	大師堂	乙瀬字乾			
M	観音堂	東中富字東安永			
N	地蔵堂	住吉字神蔵			
O	藤部八幡前の堂	徳命字名田			
P	小塚公民館	徳命字小塚			
Q	地蔵堂	住吉字乾57（吉田宅前）			
R	地蔵堂	住吉字神蔵156の横			
S	不動堂	奥野字乾66			
T	地蔵堂	冨吉字冨吉20－８横			
U	鹿の墓	矢上字春日141横			
V	地蔵堂	冨吉字中新田47横			

表 3　棟札一覧表

名称 ○は現存建物のもの		番号	西暦	年号	年	干支	目的	大　工	その他	寸法					鬼門切
										総高	片高	上幅	下幅	厚さ	
諏訪神社	本殿	1	1688	寛文	11	辛亥	建立	大工　藤原朝臣桑田又右エ門		720	705	123	105	18	右
	本殿	2	1713	正徳	3	癸巳	建立	大工　阿州ノ住　藤原朝臣桑田源七寛宗		807	787	165	125	18	
	舞堂	3	1719	享保	4	己亥	造立			656	639	137	106	16	
	拝殿	4	1737	元文	2	丁巳	建立	大工　阿州徳島住 藤原朝臣藤田市良右衛門寛宗		663	650	130	109	18	右
	本殿	5	1756	宝暦	6	丙子	葺補	棟梁　藤原大工　藤田市右近右衛門帝宦	小工　藤原大工　藤田市良右衛門寛宗	736	721	150	120	16	
	本殿	6	1777	安永	6	丁酉	葺補	棟梁　藤原大工　藤田市右近右衛門帝宦	小工　藤原大工　藤田市良右衛門寛宗	732	723	136	127	20	
	本殿　○	7	1816	文化	13	丙子	再建	大工棟梁　当村住　佐藤岡右エ門利重 美馬郡脇町住岡田民蔵英房	後見　青木安助祐英 小工　佐藤丈助　青木釜蔵	1294	1275	200	182	13	
	拝殿	8	1828	文政	11	戊子	再建	棟梁　六良左エ門藤原延房	西條三良右衛門　佐藤善五郎	1103	1075	210	178	18	
	幣殿	9	1841	天保	12	辛丑	再建	棟梁　下ノ庄　六郎左エ門	小工　当村　西條武兵エ	600	576	147	118	20	
	御興堂	10	不明				造立			454	38	117	91	21	
	本殿	11	不明				屋根替			1226	1197	227	208	27	
八坂神社 （猪熊）	○	1	1872	明治	5	壬申				455	445	108	90	19	
	鳥居	2	1880	明治	13	庚辰	上棟	石工　高島村　里兵吉		395	380	104	88	14	
	本殿	3	1916	大正	5	丙辰	修繕			465	457	107	80	18	
	拝殿	4	1928	昭和	3	戊辰	上棟	大工　岡勝英		495	477	115	88	13	
伊比良咩神社	神殿	1	1770	明和	7	庚寅	再興			607	598	107	80	17	
	拝殿	2	1790	寛政	2	庚戌	再興			614	610	110	95	20	右
	神殿　○	3	1812	文化	9	壬申	再建			512	507	102	94	17	
	御興堂	4	1827	文政	10	丁亥	新造	大工　井尻邑久エ蔵		485	480	104	87	20	
	本殿	5	1871	明治	4	辛未	屋根替	大工　大原蔵次		490	475	110	90	13	
	御興蔵	6	1880	明治	13	庚辰	再建	大工　美馬郡○○村住人　上田○○		550	543	107	91	17	
	本殿	7	1893	明治	26	癸巳	屋根葺替	大工　美馬郡脇町大字猪尻村上田栄蔵		555	545	106	90	18	
	本殿	8	1923	大正	12	癸亥	屋根葺替	大工　白川和平		725	710	140	122	34	
	拝殿	9	1991	平成	3	辛未	屋根修復	大工　森幸一		763	743	172	154	33	

平成17年７月末現在

本　尊	建物名　屋根形式　屋根材　建築年代	建物名　屋根形式　屋根材　建築年代	特記事項
阿弥陀如来立像	本堂　木造　入母屋造　銅板葺　平成２年		
聖観世音菩薩	本堂　鉄筋コンクリート造　切妻造　本瓦葺 (様式外)		
地蔵菩薩	本堂　鉄筋コンクリート造　寄棟造　銅板葺 (様式外)		
不動明王（行基作） 十一面観音立像	本堂　木造　入母屋造　本瓦葺　明和２年	鐘楼　木造　切妻造　桟瓦葺	
釈迦如来	本堂　鉄筋コンクリート造　入母屋造　銅板葺 平成９年（1997）　（様式外）		
輪円具足の南無妙法運華経	本堂　木造　寄棟造　本瓦葺　19C中期	山門　木造　四ツ脚門　切妻造本瓦葺	本堂は町指定 文化財
秘仏十一面観世音菩薩坐像	観音堂　木造　寄棟　本瓦葺　二重　18C後期	山門　木造　三間一戸鐘楼門 入母屋造本瓦葺	
愛染明王、千手観音	観音堂　木造　寄棟　本瓦葺 山門　木造　三間一戸鐘楼門　入母屋造本瓦葺	本堂　木造　入母屋造裳腰付き　本瓦葺	
薬師如来	本堂　木造　宝形造　本瓦葺　19Ｃ中期		
阿弥陀如来立像	本堂　木造　入母屋造　本瓦葺 鐘楼　木造　入母屋造　本瓦葺　昭和38年	山門　木造　薬医門　本瓦葺	
阿弥陀如来	本堂　木造　入母屋造　銅板葺	鐘楼　木造　切妻造　本瓦葺	
弘法大師	CB造　切妻造　セメント瓦葺　（様式外）		
	CB造　陸屋根造　モルタル塗　（様式外）		
	CB造　切妻造　モルタル塗　（様式外）		
	CB造　宝形造　モルタル塗　（様式外）		
	木造　切妻造　桟瓦葺　（様式外）		
	木造　片入母屋造　本瓦葺		
	CB造　切妻造　モルタル塗（様式外）		
不動明王	木造　切妻造　セメント瓦葺（様式外）		
	鉄骨造　片入母屋造　波形スレート葺（様式外）		
	木造　切妻造　銅板葺（様式外）		
	木造　切妻造　桟瓦葺（様式外）		

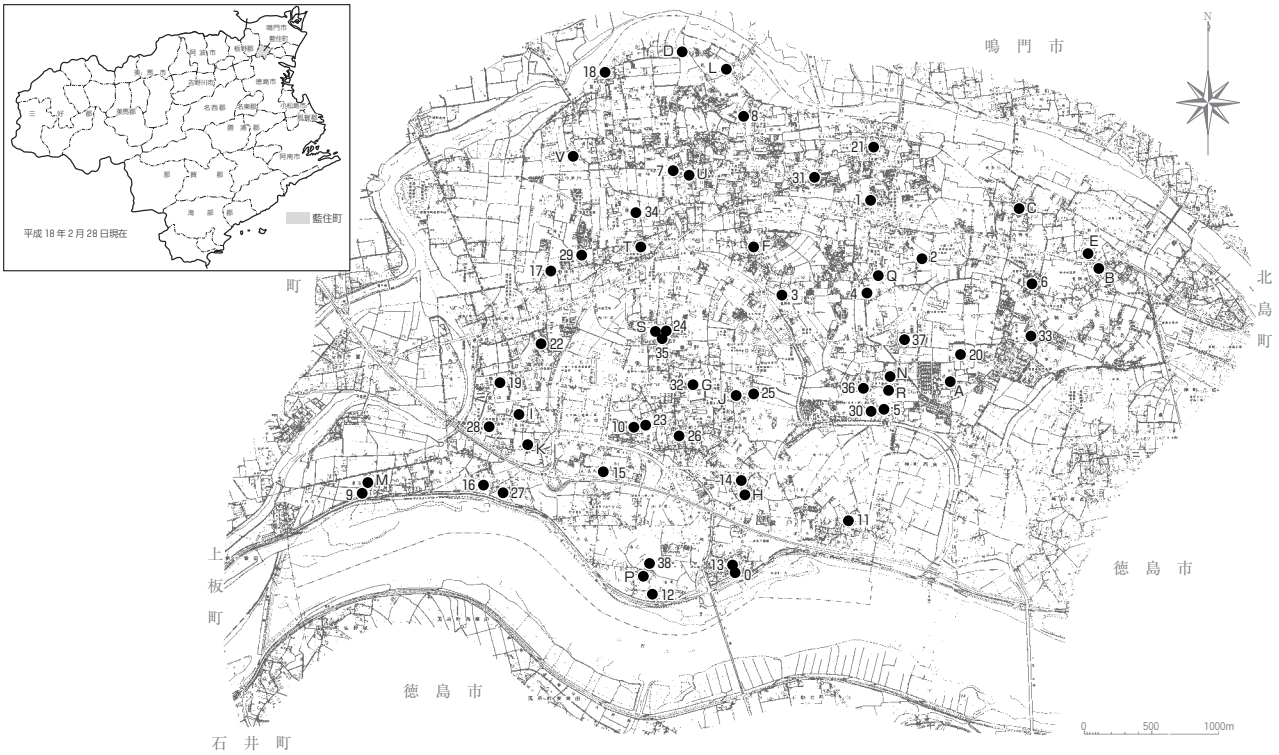

図１　藍住町の社寺建築　案内図

周囲の高欄が省略されるという特徴が見られた。

お堂は、道端に立つお地蔵さんを風雨から守る為建てられたもので、特に古いものは無かった。

3．藍住町の各社寺

1）住吉神社本殿

鎮座地　板野郡藍住町住吉字神蔵59

［本殿］木造　4棟　各一間社春日造　柿葺

身舎－円柱　切目長押　内法長押　台輪（木鼻）
頭貫木鼻（象）　二軒繁垂木
妻飾・虹梁大瓶束

向拝－角柱（几帳面）虹梁型頭貫木鼻（雲）
出三斗　繋海老虹梁　脇障子　木階五級　昇擬宝珠高欄

千木－垂直３本　　堅魚木－３本

（図２～４）

この社は、藍住町の東南、徳島市との境付近住吉字神蔵に鎮座する。創建年代は、承安２年（1172）に津守国房の勧請創祀した社であると伝えられる。

境内は西面し、西から東に鳥居（明神鳥居）、拝殿、幣殿が一列に並び、最奥東側に春日造４棟（住吉四神）、中央に流造の計５棟の本殿（図３）が覆屋に入る。本殿には、北から底筒男命、中筒男命、天穂日命、表筒男命、神功皇后を祀る。

一間社春日造の本殿は、正面に軒唐破風が付き、屋根は柿葺とする。身舎は砂岩積みの壇上に土台を回し、円柱に切目長押、内法長押を回す。木鼻付きの頭貫の上に台輪が載り、軒は二軒繁垂木とする。正面中央には、両開きの板戸が付き、側面及び背面は横板壁とし、妻飾は虹梁に笈型の付いた大瓶束を立てる。

向拝は几帳面の角柱に、雲形木鼻を持つ虹梁形頭貫が取り付き、組物は出三斗とする（図４）。また、木階五級に昇擬宝珠高欄を設け浜床を張る。軒は二軒繁垂木とし唐破風部分は疎垂木となっている。向拝と身舎は海老虹梁で繋ぐ。

「徳島の文化財〔建造物〕」によると拝殿は文政５年(1822)、本殿は明治16年(1883)の建立と記述されている。今回は棟札による確認ができなかった。昭和63年には本殿が藍住町から有形文化財の指定を受けている。

図３　５棟の本殿が並ぶ

図４　本殿正面

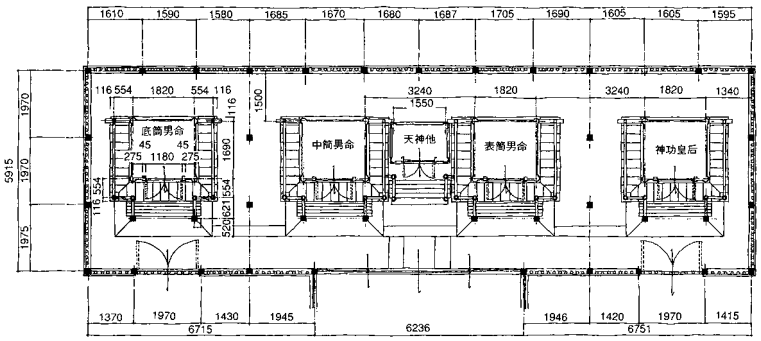

図2　本殿平面図

2）諏訪神社（表１：No.10）

鎮座地－板野郡藍住町奥野字山畑148

［本殿］木造　一間社春日造　銅板葺

向拝軒唐破風（柿葺）

身舎－円柱　切目長押　内法長押　頭貫木鼻（獅子）

台輪　三手先（尾垂木２重）二軒繁垂木

彫刻支輪　詰組

妻飾・大虹梁二重虹梁大瓶束笈形付

向拝－角柱　虹梁型頭貫木鼻（竜）連三斗　繋海老

虹梁　手挟　脇障子（彫刻）三方切目縁　刎

高欄　木段五級（木口）

千木－垂直２本　　堅魚木－３本

（図５～８）

奥野は町の中心部で、諏訪神社は奥野村成立以来の産土神で村社である。境内の奥に本殿、幣殿、拝殿を前後に並べた典型的な社殿である。

本殿は、軒の下から覆屋で保護されている。身舎は円柱を切目長押と内法長押で固め、柱頭部には頭貫（獅子の木鼻付き）と台輪を載せる。組物（図７）は三手先とし、２段に尾垂木が出る。中央部に同様の詰組を置く。軒は二軒繁垂木とする。向拝は柱頭部に虹梁型頭貫（木鼻付き）と連三斗で軒を受ける。身舎と向拝は海老虹梁と手挟で繋ぐ。三方に切目縁を張り、三手先の腰組で支持し、刎高欄を付ける。腰壁や頭貫の部分、脇障子など至るところに彫刻が充填され、匠の技がふんだんにでている。

今回、保存されている11枚の棟札（図８）の調査も行い、本殿は文化13年（1816）に当村住の佐藤岡右衛門利重、脇町の岡田民蔵英房の２名が棟梁大工として携わったことが確認できた。最古のものは寛文11年（1688）に本殿を建立した時のものであった。最大のものは、前述の文化13年のもので総高1294㎜あり、今回調査した24枚の中でも最大であった。

昭和63年（1988）に町の有形文化財に指定された。現在は本殿を残し、拝殿と幣殿は平成16年（2004）に改築されている。拝殿は文政11年（1828）、幣殿は天保12年（1841）に再建された、この地方を代表する良質の建物であったが、老朽化を理由に改築され、保存修理という方法が採られなかったのは残念である。

図５　本殿正面

図６　本殿側面

図７　本殿組物

図８　棟札

3）伊比良 神社（表１：No.15）

鎮座地－徳命字前須西65

［本殿］木造　一間社流造　桧皮葺

身舎－円柱　腰長押　内法長押　頭貫木鼻（拳）台輪　出三斗　二軒繁垂木
妻飾・虹梁　大瓶束笈形付　中備　蟇股

向拝－角柱（几帳面）　虹梁型頭貫木鼻(象)　出三斗　中備蟇股　繋海老虹梁　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子（板）　浜床　木階五級（木口）　昇擬宝珠高欄

千木－垂直切２本　堅魚木－２本

（図９～11）

この社は藍住町の南部、吉野川沿いに開けた平坦地に鎮座する。阿比良比咩命・大己貴命・素盞嗚命の三神を祭神とする、延喜式外の古社である。貞観14年（872）阿波国正授六位上伊比良咩神社に従五位下を授けた旨が、三代実録（嵯峨、清和、醍醐三天皇の時代に定められた格式）に見られ、格式の高い神社であった。昭和63年には社殿が藍住町から有形文化財の指定を受けている。また、一の鳥居は文化２年（1805）に青石（緑色片岩）で造られた珍しい台輪鳥居で、これも町の有形文化財に指定されている。

本殿は覆屋に入っている小規模な一間社流造り（図11）で三方に切目縁を回し、脇障子に擬宝珠の高欄が付く。棟札から文化９年（1812）の再建であることがわかった。覆屋に入っているために風蝕が少ないが、脇障子柱や高欄架木には著しい風蝕があり、外気に触れていたことは確実で、風蝕の有無のある二種の材があることから、前身建物の古材を一部再利用していると考えられる。この古材は棟札から推測すると明和７年（1770）の本殿再興時のものと推測される。

身舎部分は円柱を腰長押と内法長押で固め、柱頭部には頭貫と台輪（共に木鼻付き）を載せて、さらに出三斗で二軒繁垂木の軒を受ける。妻飾は虹梁に笈型の付いた大瓶束を立てる（図９）。

向拝部分は几帳面取の角柱を立て、柱頭部は虹梁型頭貫（像鼻）で固め、出三斗で軒を受けて、中備には蟇股を充てる。身舎側へは繋海老虹梁が取り付く。

木階は五級の木口階段で、浜床を張る。

木鼻や虹梁に彫られた彫刻は簡素ながら洗練されており、二つの渦が上下から巻き込むようにして、上の渦に若葉をつける。この意匠は東光寺（東中富）の木鼻とよく似ている。

今回、保存されている９枚の棟札の調査をおこなった。明和７年（1770）のものが最古の棟札であった。

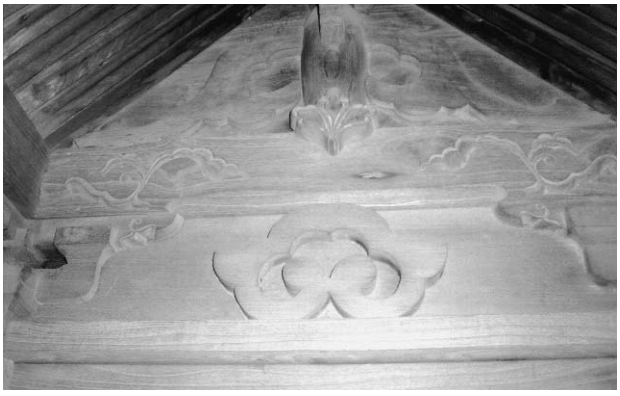

図９　本殿妻飾

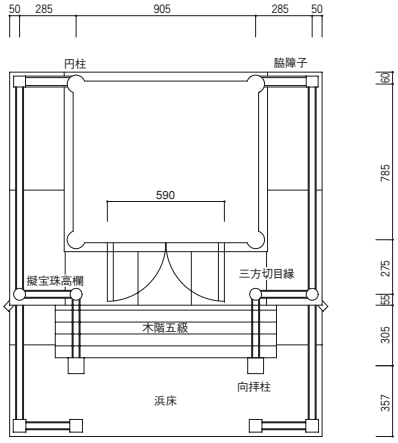

図10　本殿平面図

図11　本殿正面

４）八坂神社（表１：No.25）

鎮座地－奥野字猪熊61

［本殿］木造　一間社王子造（春日造）柿葺

身舎－円柱　切目長押　内法長押　丸桁（がぎょう）

　　舟肘木（ふなひじき）　一軒疎垂木　　妻飾・大瓶束

向拝－角柱　虹梁型頭貫木鼻（拳（こぶし））大斗肘木（だいとひじき）

　　繋海老虹梁　正面のみ切目縁　木階三級（さんきゅう）（板）

千木－なし　　竪魚木－なし

（図12～16）

この社は町の中央部、奥野字猪熊に鎮座し、本殿は一間社王子造（春日造）、柿葺きで、集会所奥の覆屋の中に安置されている。

王子（皇子）造とは、熊野三山およびそこへ詣でる街道筋に建てられた王子社に由来する。熊野造ともいう。『神道名目類聚抄』には「春日造トモ云」とある。形式からいえば隅木（すみぎ）入春日造で、入母屋（いりもや）造で妻に庇がついたものである。（図13）町内には他に春日造の本殿を３社確認できたが、王子造はこの社のみであった。

身舎は円柱で切目長押と内法長押で固め、柱頭部には丸桁が載り舟肘木で支える。妻飾りは、大瓶束のみである。（図14）向拝部の取合いは、繋海老虹梁と隅木で納め、一軒疎垂木が取り付く（図15）。

向拝は糸面取りされた角柱で、大斗肘木、虹梁型頭貫木鼻は拳鼻で錫杖彫（しゃくじょうぼ）りはない。中備の蟇股や彫刻なども省略されており、全体に簡素なつくりとなっている。縁は正面に切目縁があり板階段となっている。当初はなかったと考えられるが、後に向拝柱と身舎柱の間は袖板貼（そでいたばり）で囲われてい（図16）。

現在の本殿の建立年代は、棟札より明治５年（1872）とみられる。

拝殿は平成６年に集会所として建替えられている。

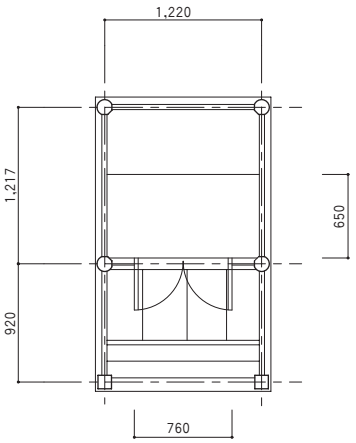

図12　本殿平面図

図13　王子造の屋根形態

図14　妻飾り　大瓶束

図15　軒部 繋海老虹梁と隅木

図16　本殿正面

5）正法寺（表２：F）

所在地－矢上字西18－１

［本堂］木造　桁行12.94m　梁間9.23m　寄棟造
本瓦葺き　向拝広一間 縋破風　唐破風玄関

主屋－内陣・円柱　外陣・角柱（入側柱）一軒疎垂木
舟肘木　内陣・格天井　外陣・竿縁天 井
内陣中央部・天蓋　鏡 天 井（雲 龍）

仏間－円柱　頭貫虹梁木鼻（象・獅子）
脇間境・透かし欄間

向拝－角柱（角面取）出三斗　頭貫虹梁木鼻（象）
送斗 皿斗付出三斗　柱間・蟇股　手挟(雲形)

山門－木造四脚門　切妻造　本 瓦 葺き
妻飾り・蟇股　一軒疎垂木　出三斗　角柱（面取）柱間・蟇股　和様肘木　地貫　腰貫　内法貫

（図17～19）

正法寺は藍住町のほぼ中央部の、正法寺川の左岸に位置する。山号を青竜山、院号を五音院とし、法華宗本門流に属し、輪円具足の南無妙法蓮華経を本尊とする。古くは禅宗（臨済宗）寺院であったが、寛永年間（1624－44）に現宗派となったと、町誌に記述されている。

本堂は、方丈型平面の六間取りで構成され、手前の一間通りに広縁が付き、中央に外陣が、中央奥に仏壇構えをもった内陣が突き出す。内外陣境は中央間のみ中敷居・腰壁とし、結界とする。庫裏と連結するタイプで、庫裏と方丈の接合部に玄関・式台を構える。内陣回りは禅宗寺院によく見られる出組で鏡天井を受けて全面に雲龍が描かれる。（図19）その奥の仏間の天井は、和様に見られる格天井で鏡板には花鳥が描かれている。内陣の仏間付近（図18）の柱や虹梁は極彩色を施し華麗にし、彩色の色使いや技法は桃山期のものに酷似するが、虹梁の若葉は発達し幕末期の様相を見せる。仏壇回りには、蜂須賀家の家紋が残る。西脇間のトコ脇には中敷居の痕跡があり、もとは書院であったから、この部屋は座敷飾りを整えていた。外観は内部長押上の建ち上がりが高く、小壁が広く間延びした感がある。

向拝柱の柱頭部には送斗をつけた出三斗があり、柱間には、18世紀の様式をした蟇股がある。向拝部の特徴として大斗と送斗の下部に皿斗をつけている。皿斗は大仏様式の名残である。向拝柱と主屋の繋ぎには、雲形の手挟がある。

建立年代は、徳島県の近世社寺建築に安政２年（1855）寺文書と記述がある。昭和59年（1984）12月に町指定の有形文化財となっている。

図17　全景

図18　内陣仏間付近

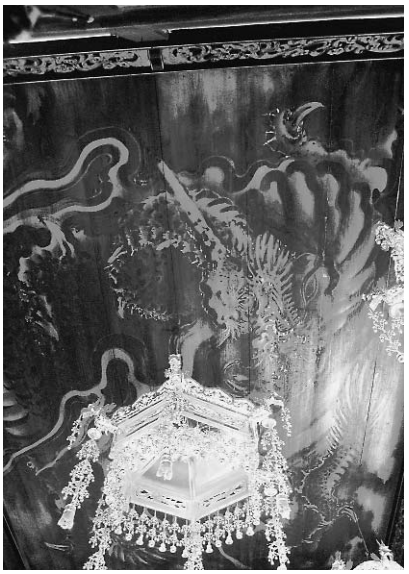

図19　鏡天井（雲龍）

6）千光寺（表２：H）

所在地－徳命字元村86

旧吉野川との分岐点から下流の吉野川北岸に位置し、町役場と名田橋間の徳命字元村に千光寺はある。由緒は不明であるが、白鳳年間（７世紀後半）行基菩薩によって開創したと伝える。真言宗大覚寺派、山号を宝珠山、院号を愛染院、千手観音・愛染明王を本尊とする。初代藩主蜂須賀至鎮公が、臥竜梅を観に立ち寄った寺である。また第二次世界大戦の末期には、大阪の野里国民学校から50人の児童が学童疎開してきたこともあった。旧主要地方道徳島引田線（現在町道）沿いに山門が建ち、門を潜ると左側に観音堂、正面に本堂と庫裡が建つ。

〔観音堂〕桁行三間、梁間三間、寄棟造、本瓦葺、正面一間軒唐破風付縋破風向拝

主屋－円柱、切目長押、内法長押、頭貫木鼻付、台輪木鼻付、出三斗、中備蟇股、正面中央虹梁型飛貫、二軒繁垂木、稚児棟、鯱矛、開閉装置（桟唐戸、引違格子戸）

向拝－角柱（几帳面）、礎盤（黄檗宗風）、縋破風（唐破風付）、虹梁型頭貫木鼻付（獅子）、出三斗、菖蒲桁下出三斗、中備彫刻蟇股、二軒繁垂木、茨破風、茨垂木、繋手挟

〔山門〕三間一戸八脚門（鐘楼門）、入母屋造、本瓦葺、角柱（几帳面・粽柱）

一重－虹梁型飛貫、蔀目板張

二重－大斗肘木、一軒疎垂木、頭貫木鼻付（拳鼻）

高欄－女梁、男梁、切目縁、持ち送り

図20　本堂正面

観音堂は、桁行三間（6.99m）、梁間三間（7.33m）と梁間寸法が大きいが、あえて妻入りとはせず、平入りの一重の本瓦葺き寄棟造とする。正面中央の柱間を2.93mと大きくとり、脇の柱間（2.03m）と差を付けて正面性を強調している。その正面手前に、広一間の軒唐破風付きの縋破風向拝を設けて賑やかにしているのも建立時期の特徴である。

縁はコンクリートとしているが、往時は切目であった。柱は円柱を立て、切目長押と内法長押、柱頭部は地紋彫りした頭貫（木鼻付）と薄い台輪を置いて固める。その上部には出三斗の組物を載せて軒を支える。柱間は斗付きの本蟇股を填めている。開閉装置は、正面中央が桟唐戸、脇の柱間は腰板格子戸とする。この堂の特徴は、頭貫や飛貫の地紋彫り、桟唐戸鏡板の彫刻、頭貫と内法長押間の中備彫刻、向拝頭貫、唐破風下の彫刻、手挟み、向拝木鼻、兎毛通（唐破風の懸魚）など彫刻を多用したり、向拝柱の礎盤や桟唐戸は禅宗の様式なども混じる折衷様式の堂である。

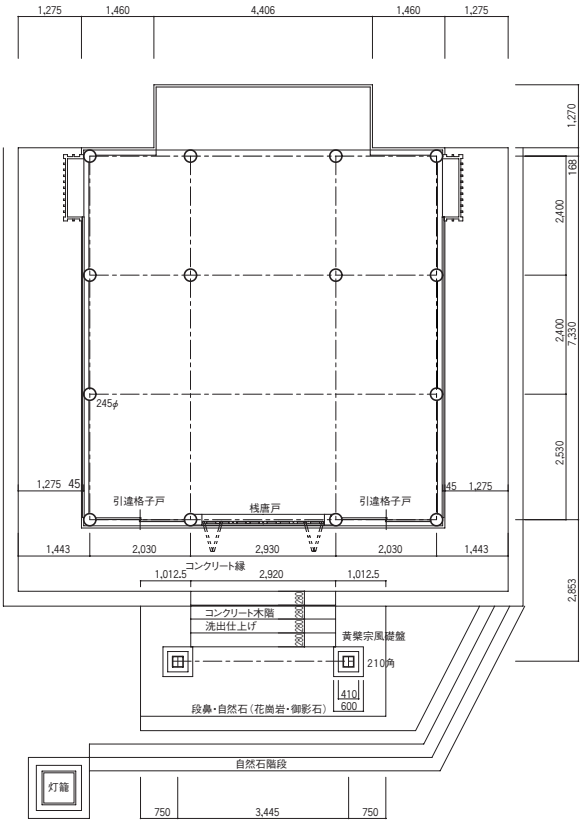

図21　本堂平面図

山門は、桁行4.7m、梁間2.95mと小規模な三間一戸八脚門で、二重部に梵鐘を吊り鐘楼門を兼ねる。梵鐘は戦争で供出にあったが、戦後の昭和41年に新しいものが吊られた。屋根は本瓦葺きの入母屋造で軒は一軒疎垂木。柱は角柱、二重の柱頭部のみに大斗肘木の組物を持つ。二重の縁は隅の柱から45度外側に、持ち送りとその上部に女梁、先端に斗を置いて男梁を挿し、さらにその先端に丸桁を載せて切目縁を支える。縁から上部の高欄は省略している。持ち送りと木鼻及び肘木の彫刻と、中央筋虹梁を地紋彫りする（図24）以外は、全体的に簡素に仕上げる。

図22　鐘楼門　正面

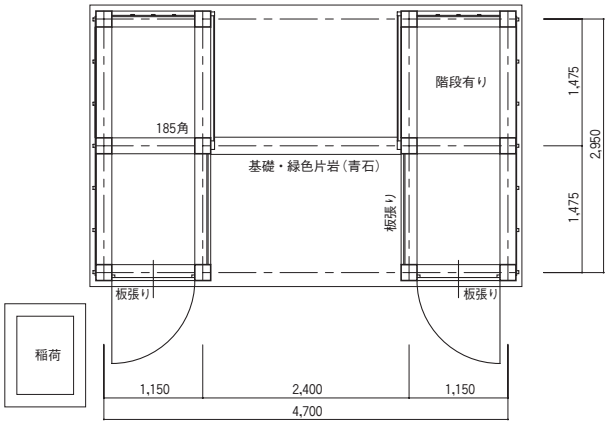

図23　鐘楼門平面図

図24　鐘楼門の彫刻

4．おわりに

藍住町の神社は、本殿が集会所を兼ねた拝殿に収められ、姿が見えないものが、数多くあった。神殿への悪戯防止や老朽化して建替え時の氏子への負担低減などが理由であろうか、都市化し新しい住民が増え旧来の村社会が変化した中ではやむを得ないのであろう。今回、執筆者の他に、上野祥吾、後藤田佳男、酒井勇治、龍野文男が調査に参加した。

参考文献

藍住町史編集委員界（1965）：「藍住町史」藍住町役場。

（社）徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会（1997）：「阿波の寺社建築」阿波のまちなみ研究会。

（社）徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会（1997）：「徳島県の文化財（建造物）」(社)徳島県建築士事務所協会。

徳島県板野郡教育会（1925）：「板野郡誌」徳島県板野郡教育会。

徳島県神社庁教化委員会（1981）：「徳島県神社誌」徳島県神社庁。

奈良国立文化財研究所編（1990）：「徳島県の近世社寺建築（近世社寺建築緊急調査報告書）」徳島県教育委員会。

前久夫（2002）：「社寺建築の歴史図典」鈴木隆一・（株）東京美術。

「角川日本地名大辞典」編纂委員会（1986）：「角川日本地名大辞典　36　徳島県」角川春樹・（株）角川書店。